

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月6日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520496

研究課題名（和文） 英語音声の聴解プロセスにおける日本語母語の干渉に関する研究

研究課題名（英文） A Study of Native Japanese Interference in the Listening Process of English Sounds

研究代表者

犬塚 博彦（INUZUKA HIROHIKO）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：90244962

研究成果の概要（和文）：

本研究は、日本語を母語とする英語学習者が、英語音声聴いてその意味を理解しようとするプロセスにおいて、「母語による干渉」がどのような点でどの程度見られるのかという問題を質的観点から追究したものである。その結果、英語音声の聴解にあたって、認識の空白域が生じている場合には、話線に沿った解析は不可能となり、日本語母語による干渉が音声面・統語面・意味理解などさまざまな面において生じることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The present study investigates native Japanese interference in the listening process of English sounds from a qualitative perspective. It is argued that Japanese EFL learners, when a perception gap occurs, are unable to pursue parsing along speech chains, and that various types of native Japanese interference occurs at the phonetic, syntactic and semantic interpretation level.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語、音声学、言語学

1. 研究開始当初の背景

筆者は、本研究を開始する前の数年間にわたって、勤務校で担当している英語音声学演習のなかで、大学生を対象とした英語音声の聴解実験を行ない、日本語を母語とする英語学習者が英語音声聴いてその意味を理解しようとするときにどのような判断がはたらくのかということについての事例研究を

行なっていた。その頃行なっていた聴解実験の方法とは、具体的には、学生たちの英語音声の聴解能力の向上に資するという観点から、①英語音声をその場で聴いてすぐに書き取る「ディクテーション」と、②あとで十分に聴き直す時間を与えた上でそれを文字に書き起こす「テープおこし」に取り組んでもらい、あわせて学生たちには、間違っても

取った箇所についてはどのような判断がはたらいたのかを各自レポートの形で報告してもらおうというもので、その提出された資料を分析することにより、日本語母語話者における英語音声の聴解のしくみについて追究していた。

ところで、それまでの数年にわたる聴解実験の取り組みにおいて、被験者たちの聴解エラーとなった箇所をつぶさに調べてみると、日英語の構造上の違いを背景にして、英語音声の聴解の際に母語である日本語がさまざまな点で干渉しているのではないかと思われる事例が数多く得られるに至った。そこで、日本語母語話者による英語音声の聴解のしくみの全貌を解明するためには、日本語母語の干渉がどのような形でどの程度なされるのかを精査することが、急務の課題であることが明らかになってきた。

2. 研究の目的

本研究は、筆者が継続的に取り組んでいる「日本語母語話者による英語音声の聴解プロセス解明」に向けての重要な基盤的研究としての位置づけで、データ制御を行なったうえでの英語音声の聴解実験を行ない、その結果をつぶさに分析し考察することにより、日本語を母語とする英語学習者が、英語音声を聴いてその意味を理解しようとするプロセスにおいて、日英の言語構造・思考法・文化などの違いを背景にして、「母語による干渉」がどのような点でどの程度見られるのかという点について質的観点から追究することをその目的とした。

3. 研究の方法

(1) ボトムアップ処理の視点からの聴解研究
一般に聴解研究においては、場面や文脈など背景知識を反映した形でリスニング実験を行なうトップダウン処理の視点に基づくものと、背景知識は入らないような状況を設定して行なうボトムアップ処理の視点に基づくものがある。実際の英語音声の聴解に際しては、トップダウン処理とボトムアップ処理の両者が相互に作用しているのであるが、本研究では、後者すなわちボトムアップ処理の視点から、あるまとまった意味内容をもつ「文」に調査対象を限定して聴解実験を行なうこととした。その根拠は、母語の干渉の問題を追究することが本研究の目的であるので、聴解実験の中であえて情報量の面で不十分な状況を設定した上で、被験者が英語音声を聴いてその意味を理解しようとする時に、うまく聴き取れなかったその空白部分をどのように判断するかを調査するためであった。

(2) 調査視点の設定とデータ制御による調査対象文の選定

英語音声の聴解にあたって日本語母語がどのように干渉するのかについて追究する本研究では、その調査対象とする文を選定するにあたっては、日英両言語の構造上の違いを背景にして、音声面、統語面、意味理解の面のそれぞれについて、以下に述べる観点を設定することにした。

具体的には、音声面については、その干渉が単音に関わることなのか、あるいは音節に関わることなのかということを観点として設定した。

統語面については、文構造の複雑さを観点として設定し、これを量的および質的観点から調査することとした。このうち、量的観点とは、すなわち聴解対象となる英文の長さの違いを背景としたものであって、聴解者が長めの文を聴解しようとして短期記憶においてエラーが生じるような場合に、母語の干渉が入る余地があるのかどうかということを観点として設定した。また、質的観点という意味においては、調査対象となった英語表現のうち、聴解者の頭の中で音の記憶として十分にリスニング用に活性化されていないものについて、聴解の際に英文を構造化していく過程でエラーが生じるような場合に、母語による何らかの干渉が見られるのかどうかという点を調査することとした。

意味理解の面については、本調査のように「文」を対象とした聴解実験においては、被験者は背景知識が十分に活用できないことから、聴解にあたっては調査対象文に含まれる限られた量の情報から、聴解者内部において何らかの場面を創出しそこに文脈を見出そうとすることが予想されることから、そのような場合に、日本語や日本文化に根ざした特徴が見出されるのかどうかを調査することにした。

以上の観点を踏まえて、聴解実験で使用する英文の選定にあたっては、市販の英語リスニング教材を精査して、本研究の目的を遂行するために調査対象として適切と思われる英文をデータ制御を行なった上で50文例抽出することにし、また、音声資料としては教材付属のCDを使用することとした。

(3) 調査方法

筆者の勤務校である岩手大学教育学部で担当している英語音声学演習の履修者を対象に、上記(2)の観点で選定した英文50文例の音声資料を使用して「ディクテーション」の実験を行なった。被験者数は、2009年度は19人、2010年度は14人、2011年度は21人で、いずれも教育学部2年生で、英語の教員免許取得を目指している学生たちである。

実験の概要は以下のとおりである。①テー

ブの音声を一度聴くたびごとにそれを書き取るという形で、一つの英文に対して3回連続して行なった。②書き取りの用紙には1回目から3回目まであらかじめ別々の欄をもうけて、後で聴解のプロセスが把握できるような形で実施した。③筆記用具はボールペンを使用することとし、すでに終わっている箇所については遡って書き直すことは禁止とした。④被験者たちには、文例ごとのディクテーションが一通り終了した直後に正しい英文との照合作業を行なってもらい、聴解エラーが生じて間違えて聴き取った箇所について、その背景にどのような判断があったのかということについて、時を置かずにその場でメモの形で書いて提出してもらうことにした。また、最終年度である2011年度の調査では、上記に加えて新たに取入れた方法として、ディクテーションの際に十分に聴き取ることができなかつたために推測で書き取った箇所がある場合にその箇所に下線を付してもらうことにした。その根拠は、それまでの実験では、実際の音声資料とは聴覚的にも全く類似点の見出されない語が書き取られていることがしばしばあったことから、被験者が実際に聴いたと思った音声をもとに書き取ったのか、あるいは、はっきりと聴こえてはいなかったものの、聴こえた別の箇所からの推測をもとに埋め合わせて書いたものなのかを区別する必要性を感じていたからである。それによって、より精度の高いデータが分析対象資料として得られることになった。

4. 研究成果

英語音声の聴解プロセスにおける日本語母語の干渉に関する研究を総括するにあたって、話線と解析の方向性の観点を踏まえてその成果を報告することにした。

一般に母語話者が母語の音声を聴解する時、聴解にあたって線形的にされた音声連続は話線に沿って聴解者の頭の中で解析される。具体的には、英語母語話者は話線に沿って発せられる英語の語順のまま解析を行なう。これは日本語母語話者が日本語の音声を聴解する場合も同様である。本研究では、日本語母語話者が日本語とは語順の異なる英語を聴解する場合、英語母語話者と同じように話線に沿って英語の語順で解析が行なわれるのか、あるいは母語である日本語の聴解パターンが解析の過程で何らかの影響を及ぼすのかということが研究全体を通しての論点の一つとして位置づけられた。以下、「(1) 話線に沿って解析が正しく行なわれて聴解が成功した場合」と、「(2) 話線に沿わずに解析が行なわれた結果、聴解が成功しなかった場合」に分け、それぞれを対比させながら典型的な事例を報告することにする。

(1) 話線に沿って解析が正しく行なわれる場合

筆者が聴解実験で取りあげた文例の一つに“I don’t agree with you.”という一文があるが、これは各年度ともに被験者全員が3回のディクテーションすべてにおいて正しく書き取っていた。ある被験者は、その内省のなかで、「[この]表現は十分聞き慣れていた。“I don’t agree”まで聞き取れた時点で正解の文が見えていたと思う」と報告している。これをその言語表現に即して解釈すると、「聴解者にとって既知の表現であれば、先を予測しながら聴くことが可能である」ということになる。この事例が典型的に示しているように、聴解者にとって既知の英語表現を聴解する場合には、日本語母語による干渉は認められないことが明らかになった。なお、一般に、母語話者が母語の音声を聴解する場合は、話線に沿って先を予測しながら順行的に解析を行なうものと考えられる(先読み解析)。この事例は一見すると英語母語話者と同じような「先読み解析」が成功したかのように見えるが、聴解者にとって既知の表現、つまり、ある音声連続を英語の決まり文句としてそのまま記憶(チャンク理解)していたケースにあたる場合と考えられるので、完全な先読み解析というよりは「擬似的な先読み解析」とであると位置づけた。

(2) 話線に沿わずに解析が行なわれた結果、聴解が成功しなかった場合

本項では、発話された英語の音声連続の聴解にあたって、聴解者の頭の中で認識の空白域が生じ、もはや話線に沿った解析が不能となった場合について、意味理解・統語面(語順)・音声面における典型的な事例を報告することにする。

<事例1>

まず、意味理解および統語面(語順)で日本語母語の干渉が認められた典型的な事例について報告する。筆者が聴解実験で取りあげた文例の中に“**He arrived here last night.**”という一文があるが、ある被験者はディクテーションでそれぞれ、(1回目)“*He _____ here last night.”(2回目)“*He write here last night.”(3回目)“*He write here last night.”と書き取っていた。なお、この被験者は、1回目のディクテーションの際には、英語の音声連続からイメージした意義作用の日本語での表われとして「彼は昨晚ここにいた」という意味であると理解したと報告しており、ここでは聴解困難だった箇所で正しくは“arrived”にあたる部分を「いた」という日本語表現でとらえていることがわかる。聴解の際に行なわれたと考えられるこの被験者の思考プロセスを言葉に直すと以下の

ようになる。すなわち、英語の語順では文末に位置し、音声上は強勢が置かれるが故に明瞭に聴こえる“here”“last night”の音声連続を入力として、意義作用を通して被験者の頭の中に喚起された意味内容を手がかりに、「昨晚」から時は過去、「ここに」から場所に関する意味内容を連想して文脈創出を行なって、聴解の空白部分を日本語の語順をもとに推測して、「いた」という意味であると理解したものと言える。つまり、これは英語の側から見れば、話線に沿わない逆行的な解析ということになり、この段階では、完全に日本語を通しての思考法になっていたものと考えられる。

<事例2>

次に、音声面において日本語母語の干渉が認められた典型的な事例を報告する。

聴解実験で取りあげた文例の中に“**I’ll ask when the train will arrive.**”という一文があるが、文頭の“**I**”は被験者全員が確実に聴きとっていたのに対して、“ask”の箇所を正しく聴解していた人は皆無に等しく、“*like” “*rest” “*write” など/l/音もしくは/r/音で始まる語を連想した誤答が多かった。これは“**I**”に続く音声連続を正しく分節できなかったことに起因するのであるが、その背景としては、被験者の頭の中で「子音+母音」(CV)を一つの音のまとまりとしてとらえようという作用が無意識のうちにはたらいたものと考えられ、音節レベルにおいて日本語母語のCV型の聴解パターンが干渉したものと考えられる。

音声面における類例として、“**It’s for all of us.**”という文の聴解をみると、被験者たちの誤答の中に“of us”の箇所を“*bus”と聴きとっているケースが散見された。これは、上にみたように音節レベルにおいて日本語母語のCV型の聴解パターンが干渉しているのと同時に、単音レベルにおいて、英語の/f/音を日本語母語の/b/音として聴いたということを示しており、「母語である日本語の耳」で英語音声の聴解を試みていたことがわかる。

<事例3>

最後に、日本語的な世界観が英語音声の聴解に干渉したのではないかと考えられる典型的な事例を報告する。筆者が聴解実験で取りあげた文例の中に“**I could see her tomorrow.**”という一文があるが、被験者の中にはこの“her”にあたる箇所を“*you”と誤って聴いてしまうケースが数多く見られた。筆者はこの事例について、あたかもテープ音声の話し手、そして被験者が聞き手という擬似的な対話場面すなわち“**I**”と“**you**”の世界が被験者の頭の中に創出されて、その

際に「内」と「外」を区別する日本語的世界観が無意識のうちに反映されたものと分析した。日本語的な思考法ではふつう「内」のほうが「外」よりも優先されて意識にのぼるために、擬似的対話空間の中で聴き手の“**you**”が連想されたものと考えた。

(3) 結語

聴解者が、英語の音声連続を語レベルですべて正しく分節できた場合は、話線に沿って解析を行なうことが可能となり、その方向は、英語の語順に沿って順行的に行なわれる。その場合、一見すると、英語母語話者のように、話線に沿って先を予測しながら解析を行なっているかのように見えるが、それが可能となるのは、聴解者にとって馴染みのある既知の表現のときであることが聴解実験を通して明らかになった。

これに対して、発話された英語の音声連続の聴解にあたって、認識の空白域が生じている場合には、話線に沿った解析はもはや不可能となり、日本語母語による影響がさまざまな形で生じることが明らかになった。具体的には、音声面では、単音レベルにおいての日本語CV型の聴解パターンの干渉が認められ、いずれも「母語である日本語の耳」を介して聴解を試みているが明らかになった。

また、意味理解・統語面(語順)においては、聴解者がある英語の音声連続を聴いて、それによる意義作用の表われとして一たび日本語を介してその意味内容が喚起されると、「思考の言語である日本語母語の頭」で、日本語の語順に沿って、日本語的な世界観のもとで意味の推測が行なわれることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 犬塚博彦、英語音声の聴解判断における日本語母語の影響、岩手大学英语教育論集、査読無、第14号、2012、20-27
- ② 犬塚博彦、英語音声の聴解プロセスにおける相対的順位、岩手大学英语教育論集、査読無、第13号、2011、73-80
- ③ 犬塚博彦、日本語母語話者による英語音声の聴解判断、岩手大学英语教育論集、査読無、第12号、2010、46-51

[学会発表] (計3件)

- ① 犬塚博彦、英語音声の聴解判断における過剰修正について、言語研究学会第28回研究大会、2011.7.30、大東文化大学(東京都)

- ② 犬塚博彦、英語音声の聴解エラーに見られる型について、言語研究学会第27回研究大会、2010.7.24、大東文化大学（東京都）
- ③ 犬塚博彦、英語音声の聴解プロセスにおける質的考察、言語研究学会第26回研究大会、2009.7.25、立教大学（東京都）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

犬塚 博彦 (INUZUKA HIROHIKO)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：90244962